

～もう戻れない～

山口大学 しまふくろう

ぼくたちはもう戻れない There's no turning back. Pandora's box has been opened!

生成 AI (Generative Artificial-intelligence) 革命が始まった。そのきっかけは、2022 年 11 月に ChatGPT が無料の対話型マシンとしてリリースされたことによる。この技術はサンフランシスコの OpenAI 社の研究者達によって開発された [1]。

ぼくが初めてその存在を知ったのは昨年 4 月 10 日のことで、たまたま TV を見ていたら、OpenAI 社の CEO (Sam Altman 氏) が岸田総理を表敬訪問したとの全国ニュースが流れてきたからである。これは異例なことである。ある会社の CEO が一国の首相を訪ねたからといって、通常はニュースにならない。また忙しい首相も会わないだろう。自分の不覚を悟った。この時点で社会はすでに大騒ぎをしていたのだ。

ChatGPT やその他の AI システムのパイオニアの最重要なひとり、Ilya Sutskever 氏である



イラスト：司馬さやか

(Nature の昨年の “今年の 10 人” に選ばれた)。1986 年に崩壊直前のソビエト連邦で生まれた彼は、常に早熟な学習者で、イスラエルで 10 代の頃にすでに大学レベルのコーディングの授業を受け始めていた。家族がカナダに移った後の 2003 年に、彼はトロント大学の Geoffrey Hinton 教授の研究室のドアを叩き、深層学習の研究を開始している。2012 年には Hinton 教授の学生らとともにニューラルネットワークのひとつ AlexNet を立ち上げ、Google に移ってからは “囲碁” の人間チャンピオンたちを打ち負かした AlphaGo の開発を手伝った。2015 年に Altman 氏や億万長者の Elon Musk 氏らの夕食会に招かれ、同年、人類に利益をもたらすことを目的とした非営利組織である OpenAI 社の共同設立者となっている。彼はこれを汎用人工知能 (artificial general intelligence : AGI) の追求を真剣に考える機会にしようとしたようだ。

より多くの計算能力向上のための資金調達を引き寄せるために、チームは 2019 年に OpenAI 社を非営利から「上限付き利益」モデルに移行し、巨大企業マイクロソフトを誘って、何十億ドルの現金と計算リソースをその運営に注ぎ込むことに成功した。その成果として大規模言語モデル (large language models : LLMs) は向上し、その結果 ChatGPT はセンセーションを引き起こし得たのである。

この成功の中で、彼と OpenAI 社取締役は昨年 11 月 17 日に突然 Altman 氏を解雇するという行動に出た。しかし、多くの従業員が Altman 氏と一緒にマイクロソフトに転職すると脅しをかけ、5 日後 Altman 氏が会社に戻ると、彼は取締役から解任された。彼は自分の行動を後悔している、

と報じられている。何があったのか？ 後で述べる。

彼は 2022 年にすでに AI が「わずかに意識している」かも知れない、と宣言していた。さらに、AGI や人類の結集した知性を超える「superintelligence」すら、数年または数十年以内に開発される可能性がある、とも述べている。誰がその可能性を否定できるのか？ 恩師のスタンフォード大学 AI 研究者 Andrew Ng 氏は、「彼は他人が同意するかどうかに関係なく、方向を選択し、それを執拗に追求できる優れた特性がある」と評している。

この AI 革命が社会に与える影響の大きさは想像がつかない。昨年末の Newsweek 特別版では、今後最も大きな影響を社会に与える存命中の人物は、Musk 氏と並んで Altman 氏を選んでいる。彼は人類社会の最も劇的な変化の先導者となる可能性が最も高い、とした [2]。世界中の VIP たちの心をつかみ、刺激を与え、恐れを抱かせたのは、彼が世界で最も重要な AI 企業の CEO という肩書きであるらしい。「彼の目標は未来を丸ごと作り上げることだと思う」と、Y コンビネーターの共同創業者であるポール・グレアム氏は 2016 年に指摘している。先述したように 2015 年には OpenAI 社を立ち上げ（CEO 就任は 2019 年）、早くも 2016 年の時点で AGI の本格稼働を宣言した。2021 年初めにはプロンプト（自然言語の記述）だけで画像を作る生成 AI のリリースを発表、そして 2022 年末に 37 歳で ChatGPT を世に送り出した。言葉の語源やモーツァルトのピアノ協奏曲の基本メロディーを即座に解答し、大学のレポートあるいは求人応募書類の小論文を、好きな作家の文体で書けることが判明した瞬間、誰もがこのテクノロジーの驚くべき力と危険性をはっきりと悟った（ぼくは半年遅れたが）。彼ら天才たちは、AI の破壊的力を、また資本主義の貪欲さが人類の存亡に関わる破局を引き起こしかねないことを、ずっと前からはっきりと理解していた。非営利組織としての OpenAI 社創設時の理事たち（AI は利潤追求を至上命題とする営利企業の手で開発されるべきではない、と考えてい



イラスト：司馬さやか

た）と、Altman 氏ら営利部門との間に亀裂が生じ、彼が一時解任された昨年 11 月の事件の理由はこれである。当然、理事会の顔触れは一新された。「責任あるテクノロジー」の理想がリーダーの暴走に歯止めをかけかけたが、結局資本主義の論理に押し切られたのである。これは 19 世紀にベルギーのレオポルド II 世がコンゴ川流域の調査と奴隷貿易撲滅を理想として設立した非政府の人道支援団体が、間もなく成長と利益を真の目的とする営利事業になり、情け容赦なく現地民を搾取した歴史を思い出させる（このコンゴ自由国における死者の数は 1,000 万人に及ぶとされている）。このような事例は資本主義と自由市場至上主義が発明されたのち、歴史上枚挙にいとまがない。はたして科学者の頭脳、資本家の推進力、規制機関の慎重さを、1 つの組織や 1 人の人間が保持できるのだろうか？ これらの騒動は、Altman 氏の超人的なビジョンとスキル、強固な意志、そして印象的な戦略（岸田総理を訪問するなど）に歯止めをかける何らかの仕組みの重要性を強く意識させるものである。このような人物が主導権を握り続けられれば、AI は一体どこへぼくたちを連れていくのだろうか？ そして拡大するパイとそれを独占したいという資本主義の貪欲さにぼくたちは抗うことができるだろうか？ 歴史が教えるところでは、抗ったものは排斥される運命のようだ（Sutskever 氏のように）。

Newsweek は述べている。Altman 氏はすでに次の手を打った。一つ目は、OpenAI 社の新理事会メンバーにセールスフォースの元 CEO と元米

財務長官を加えたこと（適度な投資家が安心できる範囲内で、収益確保を急ぐ目的と思われる）。二つ目は、すごい。将来の世界のあり方そのものを決める最重要人物になること。ぼくたちはかつてそれを「神」と呼んだのだが。

欧米とわが国では、人工知能を持つロボットに対して、異なる印象を持っているようだ。ぼくが子供の頃、よく見たマンガやTV番組は「鉄腕アトム」や「エイトマン」、「鉄人28号」などで、みんな人間の良き友達だった。一方、キューブリック監督の「2001年宇宙の旅」は、人工意識を持つコンピューター HAL が木星に向かう航路で反乱を起こす、怖いお話である。どちらも人間の対応次第では起こりうる話ではある。ただそれは単なるフィクションの中のお話と思っていた。ChatGPT が世に出るまでは。

今のぼくには近未来がどのような世界になるのか皆目見当がつかない。ただ、はっきりしていることは“ぼくたちはもう2022年11月以前には戻れない”ということである。

（2024年1月31日に作成）

参考資料

1. Noorden RV, Webb R. ChatGPT: Boon and burden? Nature 2023, 624: 509.
2. “ISSUES 2024” Newsweek 2023.12.26・2024.1.2/1.9: 22-23
3. サピエンス全史 ～文明の構造と人類の幸福～ 上・下巻 ユヴァル・ノア・ハラリ著
河出書房新社 2016年

